

# 解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（9・上）

—— 梁寿玉さんへのインタビュー記録 ——

藤永 壯／高 正子／伊地知紀子／鄭 雅英／皇甫佳英  
高村竜平／村上尚子／福本 拓／高 誠晩

A Survey of the Life Histories of Resident Koreans in Japan  
from Jeju Island in the Immediate Postwar Period (9) — Part I —  
— An Interview with YANG Suok —

FUJINAGA Takeshi, KO Jeongja, IJICHI Noriko, CHUNG Ahyoung  
HWANGBO Kayoung, TAKAMURA Ryohei, MURAKAMI Naoko  
FUKUMOTO Taku, KOH Sungman

本稿は、在日の済州島出身者の方に、解放直後の生活体験を伺うインタビュー調査の第9回報告である。この調査の目的や方法などは、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（1・上）」『大阪産業大学論集 人文科学編』第102号（2000年10月）に掲載しているので、ご参照いただきたい。

今回の記録は、1917年済州島左面中文里（現・済州特別自治道西帰浦市中文洞）のお生まれで、大阪市中央区に在住しておられた梁寿玉さんのお話をまとめたものである。

インタビューは2008年7月6日、梁寿玉さんのご自宅で、藤永壯・高正子・伊地知紀子・鄭雅英・皇甫佳英・高村竜平・高誠晩の7名が聞き手となって実施した。その後、原稿の整理を担当した皇甫が、不明な箇所の確認をお願いしようとしたが、梁さんの体調不良により、インタビューにも同席された長女の李聖姫さんが対応して下さった。修正した原稿は村上尚子を加えた8名で確認し、高村が用語解説、福本が参考地図の作成、藤永が最終チェックを担当した。

そしてまことに残念ながら、梁寿玉さんは本稿脱稿直前の2010年10月25日に逝去された。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

平成22年10月30日 原稿受理  
大阪産業大学 人間環境学部

以下、本稿の凡例的事項を箇条書きにしておく。

- (1) 本文中、文脈からの推測が難しく誤解が発生しそうな場合や、補助的な解説が必要な場合は、[ ] で説明を挿入した。
- (2) とくに重要な歴史用語などには初出の際\*を付し、本文の終わりに解説を載せた。第4～8回報告で解説した用語については、丸数字で報告番号を、アラビア数字で注番号を記し、かっこでくくった（例：(④ - \* 13) は第4回報告の\* 13をあらわす）。
- (3) 朝鮮語で語られた言葉は、一般的な単語や固有名詞などの場合には漢字やカタカナで、特殊な単語や文章の場合はハングルで表記し、日本語のルビをふった。
- (4) インタビューの際に生じたインタビュー側の笑いや驚きなどの反応については、〈 〉で挿入した。
- (5) 話者が語った日本語・朝鮮語は、話者の発音どおりに表記することを基本としたため、いわゆる「標準語」とは異なる場合がある。

なお本稿は言うまでもなく、梁寿玉さんの証言からとくに重要と思われる箇所を中心に抜粋、編集したものである。できるだけ客観性に配慮しつつ証言を再現しようと努めたが、編集の手が入っている以上、叙述に編者の主観が反映されている可能性は排除できない。本稿の内容に関する責任は全面的に編者にあることを、あらかじめおことわりしておく。

また梁寿玉さんへのご紹介の労を取って下さり、インタビューにも同席して下さった高龍秀さんにも、記してお礼を申し上げます。

## 濟州島から京都へ

### 《最初に覚えた言葉》

梁：1917年に私は生まれて、それも濟州島チェジュドの田舎でね。物心つくまでに、母親がね、あの時はね、うちの母だけじゃなくて、日本人が、濟州島チェジュドだからね、海でしょう。で、船で来てね、若い女たちを袋かぶせたとか何とかで、全部連れて行ったわけ。連れて行って、あっちやったり、こっちやったり、紡績にやったりしてた時に。うちの母親も、私がね、母親が23歳ぐらいで生まれてるかな。その時に母親が連れ去られたもんで、私は、70近いお祖母ちゃんにね、預けられて、全然親知らずわけ。

お祖母ちゃんだから、抱かれた覚えもないし、ずっと、一人で、育って。よちよち歩くようになったらね、表、濟州島チェジュドは新작路シンジャンノ\*1言うてね、濟州島チェジュド一周する広い道路があったのよ。そこへ出てね、よちよち歩いて、服を着ていたか裸だったか分からないけど、2、

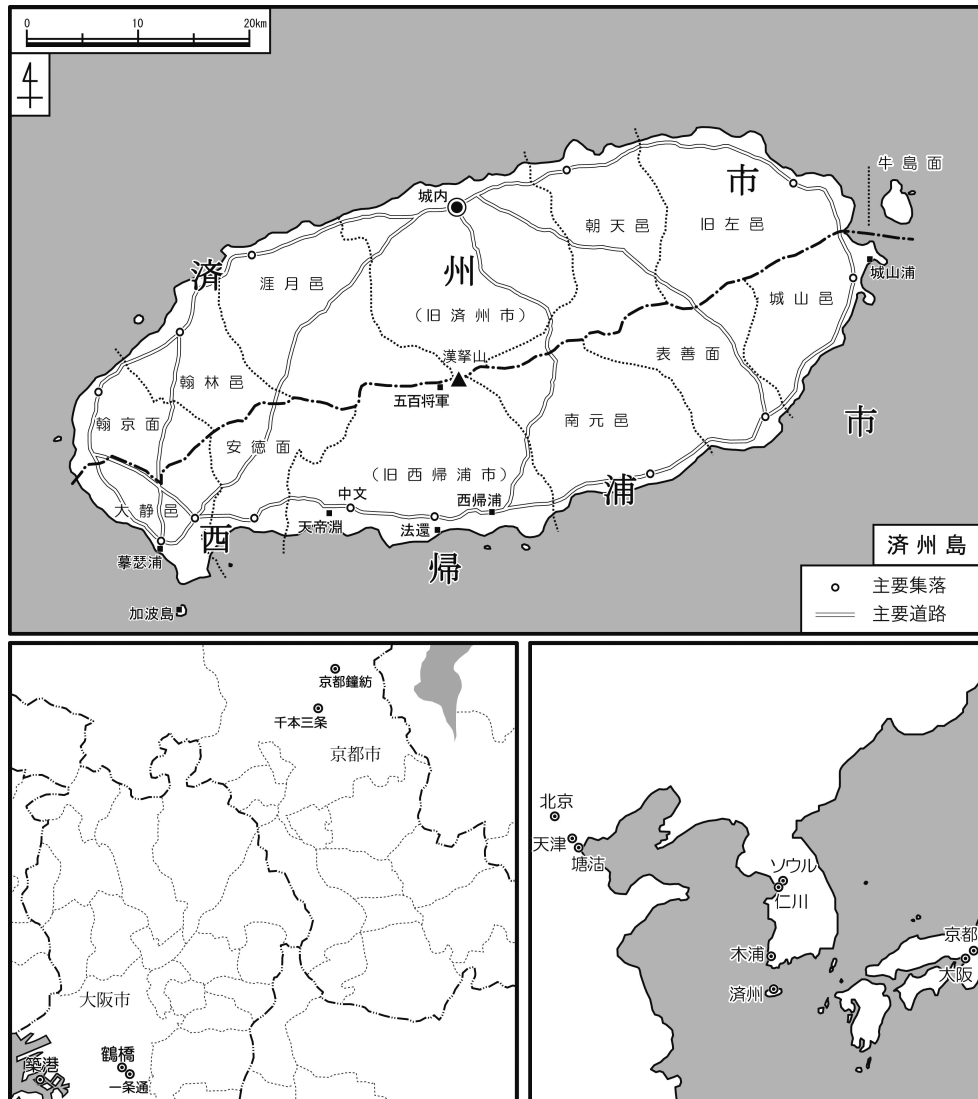


図1 本稿関係地図

3歳の時やからな。それで、そこへ集まってみんなでゴロゴロしてたら、そこらへんからね、男の姿が見えるでしょう、男の人の姿。そしたらね、そのうちの誰かがね、「왜놈(倭奴 <sup>ウエノム</sup> <sub>イヨ</sub>)」って言うのよ。「倭奴 <sup>ウエノム</sup>」って分かる？

——日本人。

梁：だから字で書いたら「倭奴 <sup>ウエノム</sup>」……になるわね。よちよちしてた時、言葉最初に覚えたのが「倭奴 <sup>ウエノム</sup>」。「왜놈 <sup>ウエノム</sup> <sub>이요</sub> (日本人だ)」「왜놈 <sup>ウエノム</sup> <sub>이요</sub>」言いながらね、物陰とかに何か

に隠れるわけ。一生懸命にね。そういうような時代だったの。だからその、男を見ると、「<sup>ウエノムイヨ</sup>왜놈이요」。それは結局、人さらいだということなの。私が今、覚えているのはね、<sup>チェジュド</sup>濟州島でも<sup>チュンムンリ</sup>中文里っていうね、うちの町だけの話よ、<sup>チェジュド</sup>濟州島全部じゃなくて。それでその、<sup>ウエノム</sup>「倭奴」っていうのがね、人をさらったり。

お墓ね。ものすご、お墓を大事にするのよ、みんなね。せやから [だから] 家の主人が亡くなったら、大事な物ね、貴重な物は全部一緒に埋めるわけ。そういうふうな習慣だった、昔は。とにかく日本人って言うと、墓掘る。墓をものすご、大事にしますやん、先祖を。今と違てね。それやのに、夜が明けたら、「あ、今日は誰々の墓が掘られた」。また明日、夜が明けたら、また誰々の墓が。墓を掘ってね、その中に置いてあるのを取るの日本人。そういうふうな日本人の印象を受けながら私は育ったわけ、生まれた時から。<sup>ウエノム</sup>「倭奴」って言うたら、墓掘ったりするもんだと思ってね。

それで、今度、町へ出るとね、女の人たちがね、タオルをね、この辺まで、こう、顔が全然見えないわけ。タオルを被って、顔を深く隠してね。それでその人たちをいつもね、<sup>シンジャンノ</sup>新作路、大通りの真ん中を歩かない。横からずっと歩くし、ものも言わない。[その人たちは] 自分も言わないけど、誰かと会って話もしない。だからね、小さい時に不思議だったの。それで私があんまり不思議やから、お祖母ちゃんに聞いたら「そこはそないしてな、誰か日本人に取られたのは恥だから<sup>ヨベチフ</sup>야배집 [倭船家]<sup>1)</sup>って言うんだよ」って言って聞いたことあるの。「<sup>ヨベチフ</sup>야배집」って言うと、今で言うね、あの、何々家って言いますね、今は。それがこの人らはね、若い女の人さがさらわれるからね、女をさらわれた家の人はね、一生恥なのよ。恥だから、タオルで顔を隠して人ともものも言わないし、それでその家の人のことはね「<sup>ヨベチフ</sup>야배집」って言うの。もう屋号が付くわけ。女、取られたら。屋号が付いてね、もうね、そういうふうなことばかりで生まれて記憶に残ったっていうのがね、ちっともいいことがないわけ。だから「<sup>ウエノム</sup>倭奴」って言ったら、あんなことばかりするんやなっていうふうに印象付けたわけ。

そうしてるうちに今度ね、東京の大震災 [関東大震災]<sup>(④-\*)</sup>が、私ね、七つくらいの時やと思う。うちの村でね、クリスチャンで牧師さんがいるの。この牧師さんがうちの村中で一番尊敬されてた人だし、人格者だったんだね。それで何でも村のことは、世話したり、みんなが尊敬してた。その人がね、殺されたわけ。東京、震災の時に。だからね、村中の人みーんなその、キリストの礼拝堂に集まって、みんながわんわん泣く

1) 濟州島の一部では、「<sup>ウエノム</sup>왜배 (倭船)」が「<sup>ヨベチフ</sup>야배」になることがある (濟州特別自治道編『増補改訂 濟州語辞典』p.645「<sup>ヨベチフ</sup>야배」項参照)。なお標準語表記で船は「<sup>ヘ</sup>배」である。

わけよ。私も一緒に行って泣くわけ<sup>2)</sup>。

このごろね、拉致、拉致で騒ぎ出してから [北朝鮮の日本人拉致に関する報道など]、なおさらこれを思い出すの。小さい時のことを。うちのお母<sup>オモ</sup>さん<sup>ニ</sup>もさらわれてそうしたの。あの時、拉致って言うのか、何って言うのか分からないけど、よう似たもんじゃない。あの時聞いた話では、袋かぶせて引っぱって行くらしい。それで船積んで。大きくなって京都に来てお母<sup>オモ</sup>さん<sup>ニ</sup>に聞いたらね、女たちをみんな連れて来られて船に積んでね、何人かは [大阪の] 築港で降ろされて。それでうちのお母<sup>オモ</sup>さん<sup>ニ</sup>は、京都の鐘紡の紡績<sup>3)</sup>へやらされたし、あとの女たちはどっか遠くへ行くんた、言うて、言うてた。遠くへって言うたら、どこだか分からないけど。そんな時代に私は大きくなって、拉致する、いうことはそりゃよくないことよ。よくないことなんだけど、そしたら昔日本人が、女をさらってね、したことは何だろうね……。まあ、そういうふうなことをこのごろ一生懸命考えながら。



図2 鐘淵紡績京都支店工場跡（現・東大路高野第3住宅管理組合）

### 《京都のオモニのところに》

梁：生まれて親なしで、八つまで育ててね。八つになって母がね、呼んでくれたわけ。なんかちょっと自由になったかして。お祖母ちゃんが、誰か、よその日本に来るおばちゃ

2) 現在の西帰浦市中文洞にも、プロテスタント長老派の中文教会が現存するが、記録の上では「関東大震災で殺害された中文出身の牧師」は確認できなかった。

3) 鐘紡（当時は鐘淵紡績株式会社）は1900年代後半より絹糸紡績業に参入するため、京都府愛宕郡田中村（現・京都市左京区高野東開町）に京都支店第1工場を建設、また合併した日本絹紡織株式会社の工場を京都支店構内に移設して第2工場とし、両者は1908年から操業をはじめた。梁寿玉さんの母親が勤めていたのは、このいずれかと見られる（京都工場は1975年に閉鎖され、現在は東大路高野第3住宅の敷地となっているが、工場の建物の一部が残されている）。その他、京都には1911年に鐘紡が合併した旧・絹糸紡績株式会社の上京工場（現・中京区東竹屋町）、下京工場（現・南区油小路八条）もあり、このどちらかであった可能性も否定できない（鐘紡株式会社社史編纂室『鐘紡百年史』同社、1988年、ほか）。

んに頼んでね、私をね、「大阪まで連れてって、やれ」言うて。それで鶴橋の、今はなくなっただけど、市電がある時には、鶴橋の駅の所にね、今でも交番所があるわ。あれ見たら懐かしい。交番所の横から入った所にね、朝鮮町があった。

—あります、あります。

梁：そこにね、連れて来られてね。毎日ね、交番所の前の電信棒のところへ。よそへ行ったら迷子なるからね。

八つの時に来たからね。生まれながらに親なしで、育ったもんだから、親を恋しいとか何とかいうこと知らないのよ。それでその電信棒のところ、こう立ってたらね、誰かね、朝鮮のチマチョゴリ、きれいな着た人が降りてきたらね。チマチョゴリ着て、どこの<sup>カルポ</sup>갈보(蝸甫)\*2と<sup>カルポ</sup>蝸甫って知ってる？

—はい。

梁：「アイゴ、どこの<sup>カルポ</sup>蝸甫かな、きれいな服着て降りて来たな」思て。それで家に来て行ってみたらそれが母親やった〈一同：笑い〉。<sup>カルポ</sup>蝸甫って言うのは、えっと何かな、女給かな。それで連れられて、京都行くんだけど、どっかのおばちゃんに連れられて行ってるような感じでね。親の感じとか、何とか、なかったね。考えるとかわいそうな気もするけどね。で、私はね、そんな状態だから兄弟がないでしょう。一人でしょう。だからいつもこう、寂しい思いがいつもするわけ。

母親がね、京都の鐘紡に連れて来られてた。だから京都行つたの。京都でね、千本三条の立命館第三尋常小学校(?)という所へ入って、1年、2年、3年まで勉強して。それで、勉強ができたので、担任の先生に連れられてね、千本三条の尋常第一小学校に連れて行かれて、数学と国語とテスト受けて。それがよかったらしくてね、3年から5年に転校された[した]わけ、私が。だから千本三条の第一小学校へ来て<sup>4)</sup>。

それで5年の先生というのがひどかった。それから、日本人が朝鮮人を差別する、いう

4) 京都市の千本三条にあったのは京都市立朱雀第一尋常小学校(現・京都市立朱雀第一小学校、中京区壬生朱雀町に所在)で、梁寿玉さんが5年生から学んだのはこの学校と思われる。ただし1~3年生を過ごしたという「立命館第三尋常小学校」なる学校は実在しない。「朱雀第三尋常小学校」の言い間違いの可能性も考えられるが、同校の位置(現・下京区中堂寺北町)は千本三条からかなり遠い。梁寿玉さんが渡日した1925年ごろの京都にある「第三小学校」としては、ほかに京都市立第三錦林尋常小学校(現・左京区鹿ヶ谷宮ノ前町)があるが、やはり千本三条からは遠く、今回は学校名を特定できなかった(「京都市立小学校の変遷」京都市学校歴史博物館<http://kyo-gakurehaku.jp/about/chart/>ほか)。



ことを味わいだしたわけ。もうこの5年の先生というのがね、私がそないして勉強できて、転校した子なのにね、ものすご差別してね。時間 [になって教室に] 入って来たらね、こうやって呼ぶの、私を。呼んでね、それでお金なんぼか [いくらか] 渡してね、「バット」 [タバコの銘柄「ゴールデンバット」]。だから私……。

——あー、買<sup>い</sup>うて来<sup>い</sup>って。

梁：こない [こんなふうに] して呼んでね。バット、お金くれたら、先生のお金やから大事に持って走って行ってね。だから、バットいうタバコよう覚えてる。このタバコ買って先生に両手で渡す。毎時間そういうふうなことだしね。ほいで、もう入って来たらタバコ吸いながら、私をジロジロ見ながらね、もう変な顔で見るの。見ながらね、加藤清正の朝鮮の虎を全部退治してな、朝鮮人を助けた話を延々とするしね、そんな話ばかりするわけ。子ども心にね、勉強する気にならないのよ。

それでね、5年になって1学期の、夏休みに通知簿をもらうでしょう。今までは全甲生だったのが、あの時は甲乙だから、甲がね三つぐらいしかないの。それでね、通知簿持ったまま、こないして座ってね、動けなかった。それから帰って来て、もう学校へ行く気がしないの。それでね、辞めて。12歳かな。済州島<sup>チェジュド</sup>へ帰っちゃったわけ。だから勉強もね、本当は制服来て女学校行くのんばかりね、夢見てたのに。5年の1学期の夏休みにね、辞めて帰ったから、もう全然勉強してないの、私。

そういうふうなことでしてる時に、済州島<sup>チェジュド</sup>からね、今で言う留学生やね。男の子たちがね、よく来るのよ。お母さんが、私が行ってからは、紡績を辞めてね、3畳の間を借りておったわけ。そうしたらね、その子らが来て学校へ入るのが中学校は両洋中学校 [現・京都両洋高等学校]、それから大学は立命館大学。だから私は立命館と両洋中学校だけしかないのかな思った。未だに覚えてる。立命館大学と、それから両洋中学校というのが今でもあるかな？

——あります。両洋中学校。

## 済州島での生活

### 《火の玉の思い出》

梁：私は、済州島<sup>チェジュド</sup>へ帰ったらね、何でか知らん、いつまでも名前が残ってね、すぐ逮捕状

が出たりするのよ。12歳で、勉強ができなくて済州島<sup>チェジュド</sup>帰ったでしょう。帰った時にはね、反日運動やね、もう盛んだった。12歳から17歳、日本に来るまでね。それで中文<sup>チュンムン</sup>のね、指導者は金漢貞<sup>キムハンジョン</sup>先生\*3言うてね、もう亡くなったけど。その先生の指導受けて、12歳から17歳まで、日本に来るまで5年間、反日精神がね、12歳から17歳までしっかり [植えつけられた]。

——大静面<sup>テジョンミョン</sup>の、お生まれになったのはどこの辺りですか？

梁<sup>チュンムン</sup>：中文<sup>チュンムン</sup>。中文<sup>チュンムン</sup>のね、私のとこね、火の玉<sup>マウル</sup>って知らないでしょう。お付けじゃないけど、知ってる？ 中文<sup>チュンムン</sup>の村<sup>マウル</sup>って言うのはね、海からこう上がって来るの。上がって来てね、だいたい済州島の村<sup>マウル</sup>って言うの、海からこうなってる平べったくな<sup>マウル</sup>った所に村がある。中文<sup>チュンムン</sup>はね、上に広い砂浜<sup>マウル</sup>があって、そこをちょっと小山<sup>マウル</sup>みたいになって、その山を越えて、上がったところに村があるの。新作路<sup>シンジャンノ</sup>言うてね、あの道<sup>マウル</sup>をね、ちょっと高い所に中文<sup>チュンムン</sup>の村<sup>マウル</sup>があるんですよ。

それで私が12歳で帰った時の家<sup>マウル</sup>って言うのはね、新作路<sup>シンジャンノ</sup>の一番西<sup>マウル</sup>側の、一番端の家<sup>マウル</sup>だったの。炊事場の戸<sup>マウル</sup>をこう開けたら、村<sup>マウル</sup>があって、そこをまたちょっと下<sup>マウル</sup>がって行ったら、天帝淵<sup>チョンジェヨン</sup> [滝<sup>マウル</sup>が有名な景勝地] っていう川<sup>マウル</sup>があるのよ。そのの、私が住んでいる家のね、炊事場、炊事場のその窓<sup>マウル</sup>を開けたら、その窓<sup>マウル</sup>からずっと下<sup>マウル</sup>って、バス停一つぐら<sup>マウル</sup>い下<sup>マウル</sup>って行<sup>マウル</sup>ったところが天帝淵<sup>チョンジェヨン</sup>。それからまたずっと上<sup>マウル</sup>がって行<sup>マウル</sup>ったら隣村<sup>マウル</sup>になるんだけど。

お天気が悪くなって来るでしょう。梅雨時<sup>マウル</sup>なんか。このころみたいに雨が降<sup>マウル</sup>ってじめじめしたら。そしたらね、この窓<sup>マウル</sup>を開けてこう見るとね、その天帝淵<sup>チョンジェヨン</sup>辺<sup>マウル</sup>りの広場<sup>マウル</sup>がすごい、火の玉<sup>マウル</sup>。だから皆さん知らないこと、私<sup>マウル</sup>みな知<sup>マウル</sup>ってる〈一同：笑<sup>マウル</sup>い〉。偉<sup>マウル</sup>そうじゃないけど。火の玉<sup>マウル</sup>。それでね、お天<sup>マウル</sup>気の具<sup>マウル</sup>合<sup>マウル</sup>で多少<sup>マウル</sup>変<sup>マウル</sup>化<sup>マウル</sup>あるの。梅雨<sup>マウル</sup>時にね、ものす<sup>マウル</sup>ご<sup>マウル</sup>い<sup>マウル</sup>雨<sup>マウル</sup>の<sup>マウル</sup>降<sup>マウル</sup>る、<sup>マウル</sup>じめ<sup>マウル</sup>じめ<sup>マウル</sup>した<sup>マウル</sup>時<sup>マウル</sup>に。速<sup>マウル</sup>い<sup>マウル</sup>よ、<sup>マウル</sup>行<sup>マウル</sup>つ<sup>マウル</sup>たり<sup>マウル</sup>来<sup>マウル</sup>たり<sup>マウル</sup>行<sup>マウル</sup>つ<sup>マウル</sup>たり<sup>マウル</sup>来<sup>マウル</sup>たり。み<sup>マウル</sup>な<sup>マウル</sup>衝<sup>マウル</sup>突<sup>マウル</sup>して、も<sup>マウル</sup>う<sup>マウル</sup>分<sup>マウル</sup>か<sup>マウル</sup>れ<sup>マウル</sup>た<sup>マウル</sup>り<sup>マウル</sup>ね、火<sup>マウル</sup>の<sup>マウル</sup>玉<sup>マウル</sup>が。お天<sup>マウル</sup>気<sup>マウル</sup>の<sup>マウル</sup>い<sup>マウル</sup>い<sup>マウル</sup>時<sup>マウル</sup>は<sup>マウル</sup>出<sup>マウル</sup>ない。そ<sup>マウル</sup>れ<sup>マウル</sup>で、火<sup>マウル</sup>の<sup>マウル</sup>玉<sup>マウル</sup>。



図3 天帝淵



——チェジュマル [済州島の方言] で何って言ってました。도깨비불?

梁：<sup>トチェビ</sup>도깨비。今はもう、そんな、ないよね。昔、私らが小さい時にいつも出た。雨降るのが多少に関わらずね。ちょっと天気悪いな、思たら、チラッチラッ、一つ二つ衝突してパッと分かれたりするけど。じめじめした時にブアーって出るの。それでね、幽霊も1回見たんよ〈一同：笑い〉。私はね、大げさな話はしないからね。4、5歳か何か知らないけど。

### 《金漢貞先生から学ぶ》

——<sup>キムハンジョン</sup>金漢貞先生は<sup>ヘニョ</sup>海女事件<sup>(7)\*4</sup>の時に警察に捕まったはずですけども、その時のこと、何か思い出はおありですか？

梁：<sup>キムハンジョン</sup>金漢貞先生はね、12歳から17歳までね、夜、昼、指導を受けて、海辺行って集まって講演聞いたり、山のへん。その時はね、パジ [ズボン] は黒のパジ履くでしょう。下が黒でしょう、上が白でしょう。そうするとチマ [スカート] をパッとかぶるの。そうしたら上下真っ黒。海辺の砂浜へ集まれ。今日は山のどこに集まれ。そうしたらね、ものすごね、私恐がりやのにね、<sup>キムハンジョン</sup>金漢貞先生の命令はもう。それで行ってね。あの、星、北斗七星。こうしてね、海辺に集まってこうしてたらね、チラッチラッと、北斗七星ともう一つ何とか言う星と、よく知ってる。それでね、初め会った時は北斗七星、こちらへんにあって、それがだんだん西へ傾くわけ。それで時間計る。あ、あそこまで来たら、もう帰らんならん。<sup>ハンジョン</sup>漢貞先生。もう、ほんと厳しかったね。

——どういうお話をしました？ どういう勉強をしました？

梁：そんな話はできないわね。資本主義がどうのこうの。私は日本でちょっと学校行った、いうのでね、本が読める、いうので、あのパンフレット。資本主義がどうだとか何だとか、いっぱい回って来るんだけど、そんなの持ってたら、警察分かったら、また大変なのよ。だけどそんなん読んだって分からん。

——そういうところに、どうして行こうと思ったんです？

梁：<sup>チュンムン</sup>中文だから。<sup>ソニョンドン</sup>少年団、<sup>ソニョダン</sup>少女団、<sup>チョンニョンドン</sup>青年団、<sup>ブニョ</sup>婦女 [会?] あって、ちゃんと組織ができてるのよ。今日はどこそこで集まりや、言うたら、<sup>キムハンジョン</sup>金漢貞先生の言うこと反対できないわ。それで夜中にね、海辺。夜トイレも一人でよう行かんかったのに、先生の命令でとっとと行って、明け方までいろんなお話。

それで、逮捕されそうになったら、お母さんがね、私を海辺の畑に連れて行くわけ。警察からどこ行ったか分からんように。そういうふうにしたりね。それで逮捕されてね、何か知らん、指 [の間に] にこう入れられてね、ギヤーってね、痛かった。そこに集まっていたグループって言うのは、私がさっき言ったように、小さい時からね、日本人が居て、やったことでものすごく反感を持ってるわけよ。それが、<sup>チェジュド</sup>濟州島の一つの反日思想に繋がってんじゃないかなと思う、私は。

——なるほどね。

## 先夫との日々

### 《夫と中国へ》

梁：それはそうと私ね、30過ぎからこっち来て落ち着いてるけどね、30まで忙しかったの〈一同：笑い〉。

八つになって日本に来て、5年の先生がひどかったので学校辞めて、また<sup>チェジュド</sup>濟州島へ帰るのが12歳。それから、17歳でまた日本に来たわけ。日本に来てね、19歳で結婚して、21歳で中国へ行って、23歳で結婚した旦那が死んで。それから<sup>チェジュド</sup>濟州島へ行ったり来たりしながら、25歳で太平洋戦争が起きたりしたでしょう。それから29歳で敗戦になって、30歳。

なんて言うのか、<sup>チェジュド</sup>濟州島と日本と中国、行ったり来たりした。21歳で中国行ったでしょう。そしたらね、21歳で中国に行って男の子一人できとったし、[夫は] 軍隊の何かで向こう [中国] で家を買うたり、何か準備したり、日本に来て機械いろいろ仕入れたり。お金持って行ったの、みんな使ってから病気で死んじゃった。日本に行ったり、朝鮮に行ったり、忙しくしてて終いにね、肺病になって寝たきりになって。肺病になったら、昔は死ぬいうことやから、<sup>チェジュド</sup>濟州島の主人のお父さんに手紙を出したの、内緒で。「肺病になって寝たきりです」って言ったら、もう手紙着いたらすぐ来た。お父さんが来て、息子を連れて帰ったわけ。連れて帰って、私は [夫が] 病気治って中国来るまで。私、自分の母親連れて行ってたから、母親と子どもと私と3人が残ってたけど。

主人のお父さんがね、お金をね、送ってくれようとしたんだけど。あの時代はね、外国から、こっち [内地] には送れるけど、こっち [濟州島] から向こう [中国] へは送れなかった、お金。だからお父さんもね、生活費が送れなくて、心配しながらでも、

しょうがないやん。だけど、日本人も朝鮮人もね、中国でね、いろんな事業して、すごく大きい財閥がいっぱいやった。その人たちがね、旦那が病気で帰ったでしょう。ものすごい誘いに来るわけ、私を。子どもにね。それこそ話にならないほどね、高価な買い物をもう毎日持って。

何でか言うたら、私は日本から行ったでしょう。向こう〔中国〕に行ってる朝鮮人はね、中国語はもちろんできるけど日本語はできない。私は日本から行ってるから日本語ができる。それで日本通。それを利用しようとしたんだと思うわ。みんながわいわいして、誘いに来て、自分の会社来たらすごい条件を出してくれるわけ。だけど私は、旦那が治って帰ってくるまでのあれやから辛抱してね。

その時はね、私、<sup>タンク</sup>塘沽いうところに居ったわけ。<sup>タンク</sup>塘沽、言うとな、中国の港。神戸から船に<sup>タンク</sup>塘沽へ行って降りて、<sup>タンク</sup>塘沽に居ったわけ。それでお母さんにね、「オモニ、高価な、贈り物いっぱいもらったり、そんなのうるさいやん、みんな私を誘うんだけど。私はな、この親父〔夫〕が帰ってくるまで、何とかしてあれ〔生活〕するから、主人が帰るまでオモニな、子ども連れてここに居たら、私、天津に出て就職してな、主人帰ってくるまで生活しとこ」いうことになって。それで、天津に来て、「カワモトヤスオ」言うてね、九州大学出た、産婦人科の先生で、病院してる先生が居って。そこへ行って、看護婦として就職したわけ。就職したらね、あの時の月給でね、100円〈一同：へー〉。

## 《夫の死》

梁：100円。あの時のだから〈一同：笑い〉、多いのか、少ないのか分からないけど。うちの母と孫〔梁さんの子〕とのアパート借りてた。その、生活はできてて。私は病院に住み込んで。それで、患者さんがいろいろな贈り物をくれるじゃない。お菓子とかお饅頭とか。そしたらいっぱい1週間貯めて、それを持って、土曜の晩に帰って一緒に泊まって、日曜の晩には病院に帰るって生活をしてた。主人帰るまでのつもりでそうしてたのが、どのくらい、1年も、過ぎたんじゃない。

そうしてたら、危篤電報が来た。旦那の。「あ、これではなかなか待ってても生きて〔中国に〕は来ないんだな」と思って、危篤電報やったら〔済州島に〕行ってもどうせ死ぬんだから、もう引き揚げて帰ろう思て。中国にもう2度と来ることはないわと思て、みな準備して。したら、病院の先生の奥さんがね、ものすごい美人でね、きれ〔い〕な人で、もう止めてね。

あの時はね、私らが行く時は、神戸からただ船に乗ったらね、ぱっと行けたの。手続

きとかパスポートとかなしに。自由に行ったり来たりできたの。だけど、後になったらものすごく厳しくなってね、国の代表だとか、新聞記者だとか、そういうふうな人らしく、行き来できなくなった、中国。個人では、行き来できなくなったのね。

そしたらね、病院の先生の奥さんがね、危篤電報受けて、私はもう帰るつもりで、もう2度と中国へ来ることないわ。してたら、とにかく私を連れて、日本の大使館連れて行ってね。渡航証明書か、まあ、パスポートやね、それを取って持たして帰そうとするわけ。「奥さん、私は帰ったら、向こう行って子ども育てながら、もう2度と来ないから、そんなの要りません」って言うのに。1カ月以上かかった。とにかく離さないの、奥さんが。今考えたら、やっぱりその奥さん大人だったわ。私はまだ若かった。23か4かだった。それでね、とうとうもうしょうがないから、帰る日は決まってるし。奥さんに連れられて大使館行って。それで奥さんが勝手にみな書いてね、パスポート、何や知らん、取ってくれて、それでこれ持って帰りなさいって言って。それ持たされて帰ったわけ。帰ってね、1カ月したら[夫が]死んだ。だから死に目に逢<sup>お</sup>うて。

### 《子どもとの別れ》

梁：それから私はね、考えたらそれほど賢くないの。昔からおとなしいだけでね、まあ、いい子だったんだろうけどね。旦那死んでからね、田舎だから、毎日水を汲みに行く仕事、洗濯しに行く仕事。帰って来て、一日炊事場入って、お食事作って、弟たちやらみんなに食べさす、その片付けする、それが仕事でね。ずっと、どこも一步も遊びにも出ないし。それで部屋の中入って、何かちょっと縫い物したり。そういうことばかりで、どれくらいしたかしらね。

そしたらね、お姑さんがね、「あのちょっと、お前、自分の部屋へな、ちょっと部屋へ来い」言うて行った。そしたらね、えらい親類のおじさん、いつもはもう、恐縮して、あまりものも言わないような親類の人たちが、お爺さん、年寄り、みな集まって。それでね、親族会議を開いたんだって、私のために。だから死んでから1年くらい居ったんかな、どのくらい居ったんか分からないけど。親族会議開いたら、結論が、私は一人でね、日本に行っても、中国に行っても大丈夫だから、出そう、いうことに結論が出たんだって。お義父さんが言うのに、「お前はな、ものすごく泣きながら、「どっちでもいいから、中国でも日本でもいいから、また出る準備しろ」っていうことになって。それで子どもを置いて行って、自分たちが見るから[と]言ってね。

それで、その時はね、私もちょっとぼーっとしてるからね、パスポートとか何か取っ

てくれたのもね、期日がどういふなのも気にしないでね、どこやら探したらそれが出てきた。出てきてね、それを持って。あの時は全部巡査は日本人や。駐在所<sup>チュジエソ</sup>へ、それをぼーっと持って、駐在所<sup>チュジエソ</sup>の前まで行った。子ども置いて行くって言うことが頭に来てるからね、[中国]行くとか何とかない。ぼーっと行ったら、お巡りさんが中でぼっと出てきた。出て来てこれを取ってね、「奥さん、これはね、自分が受け付ける」。だから、とうの昔に[期限が]過ぎてるわけよ。これは。「自分がね、受け付けて、自分の責任にあれして、本部にあれするから、奥さん、明日でも、出発するように準備して下さい」って言うのよ。「そうかな」と思って。また、ぼーっと帰って来た。一言も言わず。ほんまやったら有り難い話やけど、そんなの有り難くも何もない。なんせ、また行くとなったら、子ども置いて行くことが頭いっぱいやから。それで、「明日にでも出発するように準備しなさい」って言われた通りにね、まあ、そんなんやったら、また、[中国の]病院に行こう思って。

そうして今度、そこ[夫]の妹が子どもおんぶして。だから子ども、そうしてたら三つぐらいになったかな。おんぶして出て行ったわけ。出て行ってから私はね、済州島<sup>チュエジユド</sup>でね、船で木浦<sup>モッポ</sup>へ出て。木浦<sup>モッポ</sup>から今度は、ソウルまで汽車で行って。ソウルで北京と釜山<sup>プサン</sup>との、何て言うたか、京釜線<sup>キョンブソン</sup>って言ったかな[京義線と見られる]。それに乗って、北京に。ソウルで乗ったら北京まで行くわけ。

うーん、だからね、済州島<sup>チュエジユド</sup>で家を出てから、ざーっとな、涙を、たくさん、私、溜めたらね、一斗にはなったんじゃないか、なんていつも思って。とにかく[涙が]ザーザー流れる。その船乗るまでそういうふうにしてな。だから周囲に誰がおるか、見てるかどうか、そんなの分からない。船に乗って木浦<sup>モッポ</sup>に行って一晩泊まって木浦<sup>モッポ</sup>からまた汽車に乗って、ソウル行くわけ。汽車に乗る時に、みんな並んで立ってても、とにかく、流れるわけ、涙が。そうしてね、ソウルで、乗って、鴨緑江越えて、満洲越えて。今度北京に着いたら、奥さんが、あの子ども3人連れて、看護婦やら全部でね、迎えに来てた、駅に。北京着いたのが夜中。真っ暗がり。それでもね、みんなの顔を見られない。とにかくわんわん、わんわん泣きながら行って。

それでね、また病院に戻って生活するんだけど。朝起きて仕事はするけど。手紙を書こうと思って、便箋を出すもね、便箋ぼっとぼとに濡れるわけ、涙で。よく出るねえ。1年間、そういうふうにして1回もね、手紙書けなかったし。それでね、あの時夢を見たらね、大きな湖にね、子どもがね、湖にはまって。私が、「ああ、悪かった、悪かった、こっちおいで、こっちおいで」言うても、子どもがすねて、あっちあっちへ行く夢。それで私が湖の中に入って行って、子どもを引っ張って上げて、体拭いて着物着せてる夢を見たの。「ああ、これは子どもが病気で悪かったんだけど、まあ、着物着せたか



ら助かってはいるな」って言うふうな夢を見てね。それでまあ、その旦那が死んだ一周忌<sup>5)</sup>にはまた帰るつもりでおるから、あの時までね、辛抱して。それで一周忌でね、帰ったら、案の定その夢がぴたっと合うたの。もう、今日か、明日か、墓掘る墓まで決めてたらしい。子ども、病気で〈一同：へー〉。

私の母親が行ってみたら、孫が骨と皮だけになって、今日か、明日かももう死ぬっていうのに。どうせここで死んでもあれやから、「私が連れて帰ってね、あれ〔看病〕します」言うて。うちの里の母親が子ども抱いて来て、それで部屋に何か綱を張って、そこへ持たせて、ずっと体をもみながら、食べさせながら助けたわけ、子どもを。

そういうふうにしてね、一周忌で帰ったら子どもに<sup>お</sup>会って。それで里の母親が連れて子どもを元気にさしてたわけ。だから私も安心して。その時には別れたけど、涙出なかった。それからね、今度また中国へ来たわけ。病院に来てからは、全然泣かなかつたし。

それが最後、<sup>チェジュド</sup>濟州島に来るのが。それから、戦争がだんだん、だんだんひどくなつてね、23で旦那が死んで、太平洋戦争が25歳で、29歳の時に敗戦になった。それまではね、もう帰れなかった、戦争で。だから、一周忌に帰ったのが最後でもう行き来できなくなっちゃったの。列車の線がみな破壊されたりね、もう通らなくなっちゃって。それで今度、終戦までおるわけ、中国に。

## 戦中・戦後の中国

### 《日本軍のこと》

梁：いろいろあったわね。もう忘れたけど。北京に行って、北京から天津に帰る間、北京と天津の間は、ここ〔大阪〕と京都くらいかな。その列車の中でね、兵隊はね、社会人とお話するのを喜ぶわけよ。で、前二人兵隊座って、横に一人に座ってね。それで天津に来る間いろいろお話をしてる時に、もうね、鞆をしっかりと、「この鞆には大事な書類が入ってます」言うて、「朝鮮の学徒兵を全部これからね、前線に出して、弾除けに使えっていう指令を持って来てます」とかね。

終戦間近になって来たら、関東軍、自分たちはね、全部先にね、逃げるか何かしてね。それはもう、下の兵隊たちも何も〔かわいそうで〕見てられなかった、ほんとに。

5) 先の梁さん自身の証言では、夫の死後、1年ほどは濟州島にいた模様なので、再び濟州島に帰ったのは「一周忌」ではない可能性もある。

——北京から天津に？

梁：北京に本部があったんでしょうね。本部があって、そこで、指令を、しっかりこうして抱えててね。それを、持ってて、大事な書類を持ってもらって来ますと。

私が中国へ行く前はね、日本で、東京に居ってね。あの時は、日中戦争が始まってすぐに〔中国に〕行ったんだと思う、私はね。

で、南方の方へみな〔日本軍は〕行ってたでしょう。毎日、何か小旗を振りながら「勝った、勝った」言うてね。東京で、白いエプロンかけてね、私らも竹箒持ってね、アメリカ鬼畜がね、焼夷弾落としてこの屋根に火が付いたらね、消す準備を一生懸命してた<sup>6)</sup>。幼稚でしょう。消す準備をしながら、大きな入れ物に水をいっぱい汲んで置いてね、それでその火を消して水をかけるように。そういうふうにして、食糧不足したりしたから中国に行ったわけ。

中国行ってみたら、何て言うこと、嘘ばかりやと思ったのは、中国行ったらね、1個小隊がね、討伐に出て行くでしょう。初め行った時、<sup>タンク</sup>塘沽いう所に居ったからね。<sup>タンク</sup>塘沽の方は北京、天津よりちょっと田舎なの。そしたらね、ぞろぞろ、ぞろぞろ1個小隊が討伐に出て行くわけ。帰りは2、3人しか帰って来ない。

それで後で、その部隊の中にね、知った兵隊が一人居ってね。ほんとに人間って分からん。私ね、東京に居った時、葛飾区に居ったわけ。それで、その時に、兵隊一人がものすご懐かしそうに寄って来てね。「いや、奥さん、久しぶりです」言うてね。いつも買いに行ってた魚屋の息子なの。私がいつもね、グリーン系のチマチョゴリ着たり、エンジン系のチマチョゴリ着たり、魚買いに行く時、ハイヒール履いてたの、昔。その格好、みな言うの。ああ、今日は、あの奥さん来たとか、来ないとか。あ、そしたら〔魚屋の息子に〕間違いないなと思って、それで親しくなって、それで部隊のことをいろいろ言ってくれるわけ。

今日はね、〔軍事作戦の〕途中で、汽車でどっか行く時に、まあ言えば、拉致されるわけよ。襲撃受けるわけ、汽車が。それでその将校か何か〔中国軍に〕連れて行かれるわけ。それで、どっか連れて行って、お前らのやってること、今やってることは大変間違ったことやってるんだよ、と説得されてね。それでまた途中まで連れて来て部隊へ帰って来るんだって。そしたら、部隊の入り口で〔日本軍が〕銃殺、殺してしまう〈一同：うーん〉。

---

6) このあたりの記述によれば、梁さんはアジア太平洋戦争開戦後も東京にいたことがあったようだが、確認できなかった。

## 《終戦前後の混乱》

梁：終戦間近になってからはね、もう大変だったね。[戦後は] お金がね、ばさっと変わったの、中国ね。私なんか、そんなにお金持ちじゃなかったけど、財閥なんか大変じゃない。自家用の飛行機で上海行ったり来たりする大物財閥が多かった、中国では。

最初はね、中国人がね、朝鮮人と中国人は兄弟だって言ってね、ものすごく親しくしてね。あの「金って……」<sup>キムイルソン</sup>、金日成だと思わ。「金っていう偉い人がおってな、偉いんだよ」言うて、すごく親しくして。それで私は病院でね、日本人が中国人を「チャンコロ、チャンコロ」言うて、あの時ほんとにばかにしてね、みんな、してた。

そしたらね、終戦になった途端にね、中国人がものすごい日本人をね、いじめ出したの。お金は変わってしまった。お金はなくなったでしょう。それで街へ買い物にも出られない、日本人。しょうがないから私はね、布買<sup>ウ</sup>うて来てね、朝鮮のチマチョゴリを手で縫うて。上手いこと縫うてね、それを着て、病院のね。とにかく食べ物も買えないわけよ。お金もみな銀行に預けてたから、お金もないし。だから奥さんがね、指輪を持って、その指輪を売って、それでおかず買<sup>ウ</sup>うたり。その使いを私がするわけよ。朝鮮人だからと言っていじめられるはない。それで指輪を売って、食べ物を買って病院へ持って行って。

ある時にね、奥さんがね、「もうな、どうせこれで帰ったら別れるからね、記念に一つ持って」言うてね、きれいな色のオパール<sup>ウ</sup>の指輪の一つね、「これはあんたにあげるから売らないでね、記念に持ってて」言うてから。「何言うてんの、奥さん、私指輪なんかいらぬ、いいよ、売って来る」言うて。今思ってもね、それを記念にもらって、とってあった方がよかったのか、売って、もの買って来た方がよかったのかな、どっちかなって、いつも考えたりするけど。そんなのね、もらっても持てないよ、あの時にね。それでそれも売って、病院の食事とか、あれしてた。

そうしてたら、ある時点からね、状態が変わった。どういうふうに変ったかと言うと、今まではね、朝鮮人は兄弟だ言うて優遇してた。それがね、反対になった。日本人を認めるようになって、朝鮮人を今度、ばかにするようになった。それで私も、チマチョゴリも脱いで。その時に噂がね、日本人はね、工作が上手だから、中国の政府に、何をどれだけやったかは知らないけど、交渉した結果、日本人は認めるようになって、朝鮮人を今度ばかにするようになったっていうふう<sup>ウ</sup>にね、逆転してね。逆転してからがまたいろいろ複雑でね、大変だったわ。

《ある事件》

梁：そんな時に病院にね、患者さんで来てた家、たまにね、何かご馳走できたから言うて招待されるわけ。「今日は何かできたから食べに来なさい」言うてね。それで行って、ご馳走なってたら、突然外からね、女の人が飛び込んで来たの。飛び込んできてぱっと見たらね、とってもインテリだった。洋服着て。「ああ、もう大変なことになった」言うてね。自分の家の隣が、中国の部隊か何かで、そこで朝鮮のね、知識人だとか偉い人たちがいろいろおるやん。中国へね、亡命したりね、<sup>キムグ</sup>金九\*4だと<sup>ヨウンヒョン</sup>呂運亨\*5だとか、みな上海出たでしょう。

でもね、北京、天津の方にもそういうふうな人たちがいっぱい居ったわけ。それでこういう知識人を全部その部隊で呼び入れて、ここ飛び込んで来た女の人も「自分の主人も呼ばれて、そこに行ってるんだ」と。それがね、突然にみんな集まった途端にパンパンと拳銃の音がしてるって。それでびっくりしてね、私らご飯を食べてるその家に飛び込んで来たの。その部隊の隣の人が。でもね、聞きに行くわけにもいかんしね、何のことか分からないの。

それでね、その日はそのまま帰ってね。その後で行って、「あれは、あの事件はどうなったの」って言ったら。みんなその家の人たちが呼ばれてね、何か広い講堂みたいなところにみな集まったらしいわ。集まったら、中国人が拳銃持ってね、裏から入って来てね、バババーと撃ったんだって。みんなね、倒れるわけ。これから話でもするんかなと思って座ってたら、バババーと撃たれたからみな倒れて。それでわけが分からんで、殺されて。

それで、私が居ったところへ言いに来た奥さんの[夫は]どうなったかって聞いたら、前の横の死体の下に倒れたんだって。この旦那が。それで、みなそこで殺しておいてね、反対に拳銃で撃って来たっていうふうに部隊では言うてね。それで死体を取りに来い言うて、みんなぞろぞろ引っ張ってね。行ったら、その死体の下敷きになってたんだって、言いに来た人の旦那は。下敷きになってて、引っ張って来て、隠したんだって。まだ生きてるの知ってたら殺されるから。

それで[その夫は]、今度ゆくゆくは、万国会議、万国会議の時に自分はこれを発表するんだと言って、書き物書いてるっていうところまで聞いた。だから私ね、このごろでもいろいろな古本屋に行ってみたりしてね、ちょっと知識のある人の本、何かにね、その人が万国会議で書くって聞いてたから、何かそれらしい話でも出てるかなと思って、ずっと今までも見るけど、なかなか。

——朝鮮人の独立運動なんかの指導者が集まってるところに中国人がやって来て、銃を撃った、そういう話ですか？ 戦後、45年過ぎてから？

梁：もう、戦後言うたって、間なしやね。どさくさでね。それでそこのご飯食べに行ったとこの人はね、ソウルまで来て、ソウルで別れたけど。

### 《戦後の北京、天津》

梁：それで、私29歳で終戦になったの。私はね、戦争知らずなのよ。最高に贅沢してたの。おしゃれして、毛皮のコート着てね。北京と天津は戦争知らずだったの。果物はすごく豊富だったし、食べ物も豊富。街もきれい。聞いたら、アメリカがね、自分らどうせ戦争に勝つから、北京と天津はね、手付けるなって言う。だから北京と天津は全然、焼夷弾一つ落としたことないし。満洲はロシアが入ったでしょう。中国〔本土〕へはアメリカが入ったの。それでアメリカがそういうことだから、北京と天津はとっても贅沢。

それで進駐軍がね、ばーっと入って来たのよ。北京にも天津にも。私らはね、恐かった。ちょっと街へ出てね、看護婦たちと一緒に買い物出て、向こうから進駐軍が来ると、うわーっとどっか行ってね、店の中に隠れたりしてた。こんな時に、お風呂へね、行って。中国はね、お風呂一人ずつ入るの。だからザーっと並んでてね、大勢並んで。それで私の番になったからお風呂入ろうとしたら、私の後ろに待ってる人がね、日本人で、とっても上品な若奥さんのの。あの時ね、進駐軍なんか入ったりしたら、パンパンガール言うてね、もう進駐軍の相手の女たちが多かったけど、そんな人じゃないから、とても上品な奥さんだったから、「奥さん、いっぱい〔大勢の人が〕待ってるから、一緒に入っていいよ」言うて連れて入ったの、お風呂へ。

入った途端にこの人がね、自慢話を始めるのにな、「私たちは日本人に生まれてもう最高ですよ」言うてね。「日本は戦争に負けたけどね、進駐軍が私をものすごく大事にしてくれますねん」いう話になってくるとね、私はもう恐くなった、その話が。どっか行くんでも、車がなかったの、中国。タクシーというのがなかった。それでね、どこ行くにも乗り物いうたら人力車だったの。でね、「進駐軍はあたしらね、日本人はね、戦争に負けたのにね、ものすごく大事にしてくれます」って、ものすごく自慢するからね、私ね、返事に困ってね。それでお風呂終わって外へ出たら、進駐軍が人力車に乗ってね、待ってますわ。それでこの女の人は乗ったら、毛布で包んで抱いてずっと行くの見てね。私ね、いや、こんな考えの人もおるんだな、と思ってね。私ら進駐軍いうたら恐れから逃げてたのに。

(以下、次号)



\*本研究は科学研究費補助金（課題番号21510253）の助成を受けたものである。

## 【用語解説】

### \*1 新作路（再掲）

新たにつくられた幹線道路のこと。植民地期の済州島では、1917年に島民の負担で一周道路を完成させ、1932年には済州・西帰浦直通の縦断道路がつくられた。

### \*2 <sup>カルボ</sup>갈보

男性に対して接客サービスを営む女性のこと。もともとは固有語のようだが、文献では「蝸甫」という漢字語をあてる場合が多い。ただ具体的に、どのような女性を指すかについては、論者によって違いがある。植民地期の民俗学者・李能和は、日本語の「遊女」に相当する朝鮮女性の総称として「蝸甫」を用い、妓生（一牌）、殷勤者（二牌）、搭仰謀利（三牌）、花娘遊女、女社堂牌、色酒家などに分類した（『朝鮮解語花史』1927年）。しかしこれは必ずしも一般的な用法とは言えず、朝鮮側の文献では「蝸甫」は「色酒家」（零細な飲食店や大衆酒場の酌婦）と同じ意味で使用されるケースが多い。一方、日本人は「蝸甫」を「妓生」と対照させ「売春婦」として理解していたようである。たとえば「朝鮮人芸妓は之を妓生と称し、一牌二牌三牌の区別あり。所謂上中の意なり。何れも歌舞音曲の素養を有す。娼妓は蝸甫と称し、売淫を専業とする者なり」（西脇賢太郎「風俗警察に就て（第一回）」『軍事警察雑誌』第10巻第12号、1916年12月、38頁）というように説明されていた。

### \*3 <sup>キムハンジョン</sup>金漢貞

独立運動家・青年指導者（1896～1946）。大静面加波島で出生。加波島に設立された辛酉義塾で学び、のち同校で教えながら夜学をひらき、少年少女を対象とした運動を展開する。1925年加波青年会を指導し、同年済州青年連合会執行委員となる。1927年朝鮮共産党入党、1930年代には官製の農業組織に対抗して農民会・漁業組合結成、1931年呉大進らと済州ヤチェーイカを結成し、左面（中文面）・右面（西帰面）を担当する。1932年の海女闘争で逮捕され、1933年懲役5年の刑を受ける。1945年の解放後は建国準備委員会済州島支部保安部長に選任される。その翌年、米軍政による指名手配を逃れて慶尚南道に船で向かう途中海難事故死したと言われている。

### \*4 <sup>キムグ</sup>金九

独立運動家・政治家（1876～1949）。号は白凡。黄海道海州出身。17歳で東学に入信し、甲午農民戦争に参加する。1895年、閔妃暗殺事件への復讐として日本軍人を殺害し、死刑判決を受けるが、特赦により釈放される。1911年いわゆる「105人事件」で終身刑をうけるが減刑され、14年出獄。3・1運動後中国に亡命し、大韓民国臨時政府に参加、警務局長など中心人物として活動する。1928年韓国独立党党首となり、実力行使による抗日運動を指導する。44年臨時政府主席、45年大韓民国の名で対日参戦を宣言するが、まもなく

日本の降伏を迎える。朝鮮帰国後、李承晩の南朝鮮単独政府樹立路線に反対し、南北協商を主張するが、49年6月26日暗殺された。

**\*5 呂運亨**

独立運動家・政治家（1885～1947）。号は夢陽，京畿道出身。キリスト教に入信し平壤神学校に学ぶが，14歳で中国に亡命する。上海で新韓青年団に参加したのち，1920年高麗共産党に加入する。1929年日本警察に逮捕され，3年間服役。出獄後『朝鮮中央新報』社長となるが，36年ベルリンオリンピックの際の「日章旗抹消事件」で廃刊させられる。1944年秘密裏に建国同盟を組織し，1945年8月15日の日本の敗戦にあたっては，朝鮮総督府の遠藤柳作政務総監から朝鮮の治安維持への協力を依頼される。解放直後に建国準備委員会を組織，朝鮮人民共和国樹立を宣言するが，米軍政はこれを認めなかった。46年左右合作運動を進めるが，47年7月19日右翼青年によって暗殺される。